HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	臨床心理学講座教員と大学院生の協働による、COVID-19緊急事態宣言下での学生支援企画「茶話会」の実践報告 ： 企画に携わった学生が感じた意義と課題
Author(s)	寺田, 拓晃; 本間, 慧子; 矢澤, 正光 他
Citation	臨床心理発達相談室紀要, 4, 57-74
Issue Date	2021-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/RSHSK.4.57
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/81062
Type	departmental bulletin paper
File Information	06_2434-7639_4_57-74.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

臨床心理学講座教員と大学院生の協働による、COVID-19緊急事態宣言下での学生支援企画「茶話会」の実践報告 ―企画に携わった学生が感じた意義と課題―

寺田拓晃*・本間慧子*・矢澤正光*・吉武もにか*・田中佑典*・渡邊誠**

Sawakai (Tea Party): A project conducted by the faculty and students of the clinical psychology department during the COVID-19 state of emergency —Significance and issues considered by students involved in the project—

Hiroaki TERADA, Keiko HONMA, Masamitsu YAZAWA
Monika YOSHITAKE, Yusuke TANAKA, Makoto WATANABE

要 旨

COVID-19緊急事態宣言下において、臨床心理学専攻の大学院生と教員が学部学生を対象に行った、臨床心理学的支援活動の記録を記述し、考察を加えた。本活動の意義としては① 感染拡大初期における心理的支援となり得たこと、② 既存のコミュニティが見落としたニーズを把握できたことの2点が見出された。また、課題としては① 活動目的、役割分担、リスク評定の曖昧さ、② 実習と見なす条件の明確化、③ 院生に対する組織的支援体制の3点が見出され、これらの結果として、院生の負担が非常に大きくなったと考えられる。COVID-19流行に伴う「人とつながる」ことの困難は、今回の支援活動にも色濃く影を落としているように思えた。

キーワード：COVID-19、学生支援、臨床心理士養成、災害支援
Key words：COVID-19, student support, graduate programs in clinical psychologist, disaster support

1. はじめに

中国・武漢から広まったとされる新型コロナウイルス（COVID-19）は2019年末から世界中に爆発的な勢いで拡大している（Zhu, 2019）。WHO（2020）によれば、2020年12月20日時点で、世界での感染者数はおよそ7500万人に上り、死亡者数はおよそ168万人と多くの命が失われている。また、厚生労働省（2020）によれば、日本の感染者数は2020年12月19日時点でおよそ19万5000人、死亡者数は2800人と決して少なくない。このように新型コロナウイルスは、2019年

* 北海道大学大学院臨床心理学講座修士課程
** 北海道大学大学院教育学研究院准教授

12月～2020年12月にかけての1年間収まることなく、収束の見通しすらつかない状況にあると言える。

本学の位置する北海道は日本で第一例目の感染者が確認され、それ以降様々な対策がなされてきた。以下、北海道のホームページに残された記録[1]をもとに、一部の取り組みを紹介する。

感染者の増加に伴い2020年2月28日には緊急事態宣言が発表され、3月19日までの期間自粛要請が行われた。その後、一時期は感染が収まったかのように見えたが、感染者が再度増加したことから「北海道・札幌市緊急共同宣言」が4月12日に発表され、実施された。北海道・札幌市緊急共同宣言では、①札幌市内における接触機会の低減、②繁華街の接客を伴う飲食店への外出自粛、③緊急事態宣言地域との往来自粛、④学校及び公共施設の休業・休館、⑤医療提供体制の充実・強化、⑥道内経済への支援強化といった6つの緊急対応が行われ、より具体的な対応がとられ始め、感染防止のための制限やそのための支援がなされている。

この時期から北海道大学においても「新型コロナウイルス感染拡大防止のための北海道大学の行動指針（BCP）」[2]が策定され、行動制限が設けられた。その制限は12月現在においても続いている。

新型コロナウイルスが世界中で猛威を振るう中、それに伴うメンタルヘルスの問題が海外において多くの研究で指摘されている（Li et al., 2020 ； Cao et al., 2020 ； Gao et al., 2020 ； Rajkumar, 2020）。同様に新型コロナウイルスに伴うメンタルヘルスの問題は日本においても大きな問題である。例えば四方田（2020）は、SNSを対象にした分析から新型コロナウイルスの感染拡大が、人々のウイルス感染への不安、生活の変化や制限、報道内容や社会情勢の不安定さによる不安、疲労感、ストレスを生じさせていた実態を指摘し、人々の心身の健康に対する支援の必要性を主張している。また、本学教育学部で実施された「生活と家計に関するアンケート」（松本他, 2020）においても学生から精神的な側面のつらさや抑うつ状態の持続が語られており、これからの見通しのつかない新型コロナウイルス蔓延下では持続的なメンタルヘルス支援は一層重要になると考えられる。

そこで本論文では、新型コロナウイルス蔓延下におけるメンタルヘルス支援の一助、臨床心理士・公認心理師養成における学内実習として、本学において教育学院臨床心理学講座の教員と大学院生が実施した学生支援企画「茶話会」について、主に企画運営に関わった学生の視点から、企画の経過と内容を整理し、本企画の意義と課題について考察する。

2. 方法

2020年4月から6月にかけて行われた、本企画の立案から企画終了後のデブリーフィングまでの経過について記載する。経過については、本企画の立案・実行のために行われた教員と院生によるメールでのやり取り、企画中の面談･振り返りの記録やそれをもとにした報告会の資料、院生間の打ち合わせや、教員と院生の間で行われたデブリーフィングの記録を参照しながら整理した。そして、上記の各種記録と各々の体験を元に、共著者の間で意見交換を行いながら、本企画の意義と課題について検討した。

---

[1] http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/ssa/koronasengen.htm
（最終閲覧日：2021年1月25日）

[2] https://www.hokudai.ac.jp/covid-19/ （最終閲覧日：2021年1月10日）

なお、本論文の著者は、企画の立案・運営に実行委員として中心的に携わった院生2名、企画にスタッフとして参加した院生2名、振り返りやデブリーフィングにのみ参加した院生1名、臨床心理学講座の教員1名で構成されている。その中で、実行委員として携わった院生の1人（寺田）が筆頭著者となり、共著者たちの意見や記述をもとに、本文の執筆を行っている。

3. 企画の経過

3. 1. 教員による提案と院生有志による企画立案

2020年4月20日、本学が独自に設定を行っている行動指針であるBCPレベルが3に引き上げられ[3]、いよいよ学生の孤立が案じられる事態となる。そのような状況をうけ、同月21日、臨床心理学講座院生企画として、学部生を対象とした「茶話会」を院生の実習も兼ねてzoomで開催するという案を、講座教員の1人が講座のメーリングリスト（以下「ML」と表記）にて提案する。

提案では、「学部2年生、学部3年編入生を対象とし、学生委員長から声をかけたい学生の候補を絞り、臨床心理学講座の大学院生が茶話会運営を行う」という企画の枠組みと、実行への道のりとして「1、代表者数名で企画書を書く。2、企画書を学生委員会委員長に提出する。3、専門家の意見も聞き、修正案が出たら再検討をする。4、企画が確定したら実行する」という流れが示された。

そして、実行開始の目安をゴールデンウイーク前とし、企画の実行委員を引き受けたい学生はMLに名乗り出るという形で、茶話会企画は始動した。その結果、院生3名（修士2年目が2名、修士1年目が1名）が実行委員に名乗りをあげ、以降はその3名が中心となって企画を考えていくこととなった。この3名はいずれも北海道大学教育学部を卒業した内部進学者である。これに関して、後に本企画を振り返った際、学外から進学した学生の1人は「良い企画だと思った」が、「大学のことを聞かれても私には答えられないし、自分が企画側として参加するのは無理だと思った」と述べている。

実行委員が揃った時点で、教員から翌日（22日）までに企画書を練り、学生委員会に提出、講座内での協議の後、次の週から企画を動かせるように進行するよう指示が為された。

手順を示された院生3名はその日のうちに遠隔での企画会議を実施し、茶話会開催にあたっては、「①集団から元気をもらう場（大人数制の茶話会）、②個人的な悩みを相談できる場（少人数制の茶話会）」という2つの居場所が後輩達に必要なのではないかという結論に達する。その後、それぞれのコンセプトを基に2種類の企画書を作成した。しかし、企画書を作成後に、中心メンバー以外の院生から以下のような意見をもらう。

・学部生の間で、編入生や学部生対象に同様の企画が計画されているか確認が必要である。
・既に企画されていた場合、年齢の近い学部生に任せた方が良いのではないか。
・学部生と重複して行う場合には、臨床心理学講座内でやるオリジナリティを出す必要がある。

この意見も受け、大人数制の茶話会開催については①学部生に依頼する、②院生が実行する、③少人数制の茶話会開催のみに力を注ぐ、の3つの案を提示した上で、教員にどのような方向

[3] BCPレベル3においては、授業は全面オンラインでの実施となり、基本的に学生は大学構内に立ち入ることが禁止される。また、部活・サークル等の課外活動については全面禁止となる。

性で茶話会を計画すればよいか指示を仰ぎ、協議の結果、今回は少人数制に注力することとなった。そして、一回あたりの人数が多くなりすぎることを防ぐため、本学教員が教育学部に所属する学生を対象として2020年4月に行った支援ニーズ調査の結果を元に、講座教員の方で企画対象者を2群に分けて、声をかけることとなった。(Table.1)

その後、院生の作成した企画書について教員間で共有、検討が行われ、同月24日の臨床心理発達相談室会議（以下、「相談室会議」と表記）にて、講座の院生、教員へ茶話会企画についてのアナウンスが行われた。そして、相談室会議での意見も受け、実行委員の院生3名が対象者へのリクルート文章と、企画書の修正案作成を行った。同時に臨床心理学講座の院生全体に協力を募り、最終的に中心メンバー3名に加え、8名の院生が運営スタッフとして集まった。

Table.1　企画対象者の状況について

A 群　25 名

IT 機器＆ネット環境	両方 OK20 名、ネット環境なく準備できない 2 名、IT 機器なく準備できない 3 名
経済状況	生活費に不安あり 13 名・うち対応策なしは 11 名
感染に対する不安	強い不安あり 10 名、不安あり 15 名・うち 11 名は今後不安が強くなりそう
頼れる人の存在	全員、多少頼れる人がいる

B 群　20 名

IT 機器＆ネット環境	全員が IT 機器を保有し、ネット環境もある
経済状況	生活費に不安あり 8 名・うち対応策なしは 5 名
感染に対する不安	不安あり 5 名、多少不安あるが大丈夫 11 名、特に不安なし 4 名
頼れる人の存在	多少頼れる人がいる 9 名、頼れる人がいない 11 名

3. 2. 企画実施に向けた枠の検討

4月25日、対象となる学生からの企画に関する質問や意見を受け付けるため、専用のgmailアカウントを作成する。相談時間は無料版zoomの時間制限に合わせ、遅刻やアクセス不良の場合の待機時間と、締めの挨拶の時間も含め40分に設定することとなった。また、毎回の終了後には、シフトに入った院生が講座教員と共にその日の活動について振り返る時間を「SV[4]」の名目で設けることとなった。SVは講座教員が交代で担当する事となった。

学部生のリクルートについては、教員の提案により「集まる人数のおよその予測を得るために、日程調整のアプリを使用する。院生はその日参加を希望する者がいる/いないに関わらず、zoomを開いて待機する。誰も集まらなかったら、来談者ゼロとして記録を残す。」という方法

[4] スーパーヴィジョンの意。以下同じ。

で実施することが決まる。これに関して、院生側は「メールで学部生の希望日を予め集計した上で、参加希望がある日のみzoomのトークルームを作成する」という運営コストの削減を重視した方法を打ち出していたが、教員からの「タイムリーさが重要なのに、機動力に欠けてる」との意見があり、不採用になった。

また、日程に関しては、教員側から提示されていた実行開始日（ゴールデンウィーク前）も踏まえ、2020年5月4日から11日までの毎日、計8回企画を実施することが決定した。

その後、4月中に院生のスケジュール調整、スタッフ紹介を加えたリクルート文章最終版の作成、実行委員によるzoom操作の確認など着実に準備を進めていき、5月1日、ついに講座教員から企画対象者に向けてリクルートのメールが送られた。

3. 3. 企画の実施

以降、各回のSVにおいて話し合われた事項について整理する。参加者は5日間を通して計2名であり、相談内容は、学業に対する不安や、学生同士で交わされる履修等の情報が入りづらいことへの不安などであった。

第1回：2020年5月4日（月）10:00～　参加者1名

【SVでの検討事項】

茶話会の進行に関しては、ファシリテーターとタイムキーパーを事前に決めることにする。また、参加者が話しやすいように、企画の流れを説明するスライド（Figure.1）を一枚作成し、それをzoomの画面共有の機能を用いて、参加者と共有することが決まる。

SVは企画を行ったものと同じzoomのトークルームで行われたが、まだ参加者が残っているにもかかわらず、他のトークルームで待機していた院生が入室してしまった為、SV用のトークルームを別途作成することとなった。

初日の感触としては、今後本企画の場を学部生の調査・ニーズ吸い上げの場として活用できそうだという意見が教員から出た。

第2回：5月5日（火）19:00～　参加者なし

【SVでの検討事項】

この日は参加者がなく、日程調整アプリ上でも、参加希望学生の人数が増えていないため、追加で学部生へのリクルートを行うか検討した。

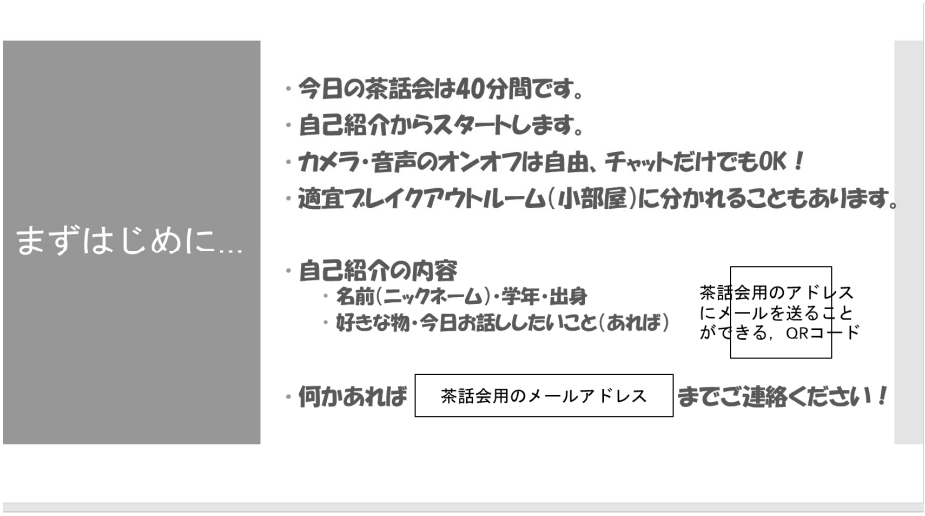

Figure.1　実際に表示したスライド（一部編集済み）

第3回：5月6日（水）10:00～　参加者なし

【SVでの検討事項】

この日も参加者は居なかった。その日のうちに対象となる学生に向け、リマインドのメールを送ることとなった。また、一度参加した学生のリピート参加も可能にすることが決定した。

現在の学部生のニーズは「授業、資格、学生生活」等の具体的アドバイスであり、心理的な支援よりも、ゼミや授業、資格取得などの学業にまつわる情報に関する支援が求められており、今後ニーズの変化も考えられることから、ゴールデンウイーク後も定期的にこの企画を続けていく必要があるのではないかということが話し合われた。

第4回：5月7日（木）13:00～　参加者1名

【SVでの検討事項】

一部の学生は、学生同士で交わされる情報や、他の学生とのつながりを思うように得られないという実態がある。そのような学生が本企画に積極的に参加しているのではないかということが話し合われた。

システム面に関しては、少し予定時間を超過してしまったため、タイムマネジメントを目的として画面共有でタイマーを導入することが決まった。

第5回：5月8日（金）19:00～　参加者なし

【SVでの検討事項】

この日の日中、実行委員の学生3名の間で6日（第2回）のSVにおいて、教員から提案された、ゴールデンウイーク終了後も本企画を定期的に行うという案についての話し合いが行われた。この時点で実行委員の学生は皆、教員から提案された実習という枠組みでもありながら、自分たちで0から企画立案・運営を行い、その上で教員のアドバイスにも従わなければならない現状に対して不満を露わにしていた。そして、この日のSVに参加していた実行委員の学生から、

3人でこれ以上の仕事を抱えるのは不可能であるという意見が教員に共有されることとなった。

また、この日のSVでは、当初の想定とは異なり、心理的支援のニーズがそこまで現れていないことに関して、企画段階で学部生の実情を十分に把握できていないまま企画立案を行っていったことが原因ではないかという分析が行われた。また、本企画に限らず学部の催しに一切参加せず、他の学生との関わりを持とうとしない学生もいるため、そういった対象は、この茶話会で扱うことは難しいだろうということについても話し合われた。

第6回：5月9日（土）19:00～　参加者なし

【SVでの検討事項】

実習時間としての茶話会の枠組みについて確認した。人が来なかった場合、待機時間はカウントされず、振り返りの時間、記録の記入、準備時間のみカウントすることが決定。企画者3人が準備のために要した時間をカウントするかは、教員側で持ち帰り検討することとなった。

第7回：5月10日（日）19:00～　参加者なし

【SVでの検討事項】

この日も参加者が居なかったため、殆どが雑談となる。

雑談の中では、今回のような企画や、学生間で行われている遠隔での飲み会など、オンラインでの対人交流に関して、まだまだ改善と工夫の余地があるのではないかといったことが話されていた。

第8回：5月11日（月）19:00～　参加者なし

【SVでの検討事項】

このCOVID-19の世界的流行を一つの災害であると考えると、災害時はニーズが移り変わるため、今後心理支援のニーズが高まる可能性もある。しかし、感染症の拡大に必要とされる支援の在り方が、地震のような自然災害と全く同じであるとは言えず、実際のところ予測を立てることは難しいという見解が教員から語られる。

また、従来の災害支援時に求められる「水だ！食べ物だ！」（今回でいえば「PCだ！ルーターだ！情報だ！」）といったような、被災直後のニーズと、こちらの「心理支援を求める学生がいるのではないか」という想定とのミスマッチが起きていた可能性があると分析が行われた。本企画を実施した時期は、先に述べたように足りないものを補充する時期であったと考えられ、「話したい」といったニーズはもう少し落ち着いた後に出てくるのかもしれないというのがこの日のSVの総括であった。

3. 4. 企画後の振り返りとデブリーフィングの実施

5月15日、実行委員の3名が、本企画に参加していない者も含む講座の院生と教員全員に対して、企画についての事後報告をzoomを用いて行った。

その際、実行委員の1人から、企画運営に関して感じていた不満や、本企画を継続する場合に改善すべきと考えられる点として以下の内容が語られた。

①スピード感と綿密な計画の両立

「スピード感」や「迅速な対応」に重きを置きすぎた結果、計画立案と実施が急かされ、運営に関わる人間の足並みが揃わないままに企画が進行してしまった。

②負担の分散と連携の体制

今回は実行委員の3名が0から企画立案と運営に関わる調整の殆どを担い、その上で、メールで確認を行う度に返される教員のアドバイスにも対応する必要があった。このことに関して、実行委員の学生は早い段階から負担の重さを感じていたが、それについて相談できる場もなく、教員に対しても、学生と教員という関係や、実行委員を自ら引き受けたという状況もあって自分たちの負担について言い出すことができなかった。

それ故、この先活動を継続するのであれば、今回のように一部の学生に大きな負担がかからないよう、事前に教員と学生の役割分担や連携体制を定めておく必要がある。

③実習としての基盤の整備

講座教員がMLで提案を行った時点から、本企画は臨床心理士・公認心理師養成に関わる学内実習という位置づけとしても考えられていた。しかし、企画が進む中で徐々に実習時間としてどこまでをカウントできるかという基準が曖昧だった部分が明らかになり、学生としても困惑した。特に、実行委員が企画立案のため話し合い等を行っていた時間に関してカウントされない場合、企画当日のみスタッフとして参加した院生と実行委員の間では明らかに労力の差があるにもかかわらず、カウントされる実習時間について変わらないという明確な不平等が出るため、しっかり検討して欲しい。

④目的の設定について

今回、当初予定していたような「心理的支援」よりも履修やゼミ等に関する相談が多かったが、これに関してどこまで「臨床心理学講座」として引き受けるべきか。今後同様の企画を運営するのであれば先に目的を絞り、参加者にもそれを伝えるべきではないか。

⑤今後どのようなツールを用いるか？

今回は日程調整アプリで、参加者の把握を行い、無料版のzoomで企画を実施したが、今後の企画の目的に応じて、この部分も再検討する必要が出てくるのではないか。

そして、これらを踏まえた上で、「(本企画を定期的に) 続けていくかというところと、続けていくのならどういう形で続けていくのかを議題にしたいです」との提案が為されたが、結局この日、そのことについて話し合われる時間はなかった。[5]

その代わり、8回目のSVにおいて、自然災害状況をモデルとして今回のコロナ渦を考えられるかについての話が出てきていたことから、講座教員の一人が「COVID-19の流行における心

[5] このことに関して、この日報告を行った実行委員の通信状況が思わしくなく、報告者の音声が一部途切れ途切れになって参加者に伝わってしまっていたことも、影響している可能性があることをここに注記しておく。

理支援の在り方に関して、自然災害状況をモデルとしてよいか？」について話し合いたいと提案し、この日はその話題に終始することとなった。そして、教員から、この先の企画に関しては学生の方で別日に打ち合わせを行ってもらいたいという意見が出たところで、この日の報告会・会議は終了した。

土日を挟んで、5月18日、本企画に関する提案者であり、教員学生間のやり取りを中心的に担っていた教員が、多忙を極める状況となっていることから、本企画の主担当（以下、「担当教員」と表記）を他の講座教員と交代することが、実行委員の3名にメールを通して伝えられる。

そして新たに担当となった教員から、15日に行われた実行委員からの報告を受け、実行委員が色々大変な思いをしていたようであるため、これからの企画についての打ち合わせの前に、一度ざっくばらんにこれまでの活動を分かち合う「デブリーフィング」の機会を設けるのはどうかという提案が行われた。実行委員の3名はこれに応じ、その日の夜、実行委員とデブリーフィングの提案を行った新しい担当教員のみでデブリーフィングを行う事となった。

デブリーフィングにおいては、まず改めて実行委員側として本企画について感じていた不満や問題だと思った点について、報告を行った学生が教員に話をした。他の2名の実行委員からも、それぞれに企画を進行する中で感じていた「胸の痛み」や徒労感といったことが語られた。それを受け、担当教員は教員側の状況としても本件に限らず、今回のCOVID-19感染拡大に関する対応や業務に追われ、教員間のコミュニケーションも不十分であったことを述べた上で、本企画を継続ではなく、一旦休止することも選択肢に入れた方が良いかも知れないという私見を述べた。そして、翌日に予定されていた「打ち合わせ」についても、今後どうしていくかを議題の中心に置くより、担当教員と実行委員以外の学生も交えて緩く企画の振り返りを行い、その中で今後についても意見交換するのが良いのではないかという提案が為された。

そして、デブリーフィングの翌日、担当教員と企画に関わらなかった学生も含む計10名の講座院生が集まり、企画の振り返りが行われた。まず、実行委員の学生から前日のデブリーフィングの内容について改めて整理した後、他の学生から自由に本企画に関しての意見を募った。

話をする中で、企画自体は全く無意味なものではなく、スタッフとして参加した学生としても楽しいものではあったが、MLで教員と実行委員のやり取りの一部を垣間見ていた実行委員以外の学生からみても、今回の企画は実行委員の3名に対する責任と負担の大きさを感じるものだったということが語られた。そして、実行委員の募集が早々に締め切られたこともあり、教員と実行委員の学生の間だけでなく、実行委員と他の学生との間にも立場の違いによる距離ができてしまい 、他の学生が介入して負担を分散させるのが難しかったことも語られた。

また、企画を振り返る中で本企画のとりまとめを行う責任主体がどこにあるのか、企画のゴールがどこにあるのかと言ったところが曖昧なまま、だらだらと流れのままに企画が進んでしまっていたのではないかと言う意見もでた。

本企画の次の動きを考えるにあたっては、教員から「現状として企画に対する徒労感や不満から学生たちのモチベーションが落ちてしまっている側面があり、もし続けるのであれば学生たちのモチベーションが続くようなやり方を考えた方が良いのではないか」との提案が出た。

それを踏まえて、今後について考えたとき、学生の中から「今回は授業のないゴールデンウイークで授業や実習等に追われていなかったからこそ、企画を行うことができたのではないか」「授業や実習が本格的に始まっており、修士2年生は修士論文の執筆で多忙になる中で企画を続

けることは本当に可能だろうか」との意見が出てきた。また、多忙な中でも継続するのであれば、学内実習としての枠組みは残して欲しいが、そうなるとまた実習として成り立たせるために教員側との折り合いをつけて行く必要があるかも知れないという意見も出た。

このような話し合いの結果、まず担当教員が学生たちの意見を教員に伝え、それも踏まえた上で教員側でも一度、本企画を今後どうしていくべきかについて協議することとなった。

3. 5. 企画の休止

5月19日の打ち合わせ後、教員会議で共有する内容を検討するために、担当教員と実行委員が改めてデブリーフィング・打ち合わせで話された内容の整理と、教員への共有の仕方について、メールを用いて思案を重ねていった。

5月27日、担当教員が講座教員へメールを送信する。メールの内容は、①デブリーフィングを提案して行い、打ち合わせも半分はデブリーフィング的な内容になったこと、②それにより院生のもやもや感や疲弊感が、ある程度軽減されたと思しいこと、③茶話会打ち合わせの内容は複雑で整理が難しく、院生と対話しながら考え続けていること、④院生は、可能であれば茶話会は実習枠を保った上で継続したいとの意向であること、⑤来週に教員会議を行って茶話会について話し合いたいこと、といった内容であった。

6月4日、教員会議に先立ち、担当教員がデブリーフィング・打ち合わせの報告を、講座内で共有されている茶話会の記録簿に記載する形で行った。報告には「教員にとって耳の痛い内容も含まれるが、考えた結果、お伝えします」という文言が書き添えられていた。以下に内容を転記する。

《前半》これまで茶話会活動の振り返りを行い、考え方を共有した。また、負担の大きな活動でもあったことからデブリーフィング的な内容も含まれた。

・企画立案をする等、院生側に自主的な参加が求められたが、どちらが主導し、責任の所在がどこにあるのかがはっきりしなかった。組織上の大きな問題があった。組織として機能していなかったと感じた。
・最初の企画段階からSVがあると良かった。
・院生は教員の意図を汲み取り、顔色をうかがいながら進めてゆくこととなり、無力感がつのった。
・院生、教員の力関係から、教員の意見に対する反対を唱えづらく、院生が力を入れて考えた企画が採用されないことが続いた。（少なくとも院生はそのように感じていた。）士気が低下した。
・教員側から要求される水準が高く、また要求の理由が分かりづらかった。短期間で完成形を求められているように思えた。
・教員に相談すると院生の仕事が増えてしまうことになり、相談できなかった。
・進め方が非常に速くて次々と仕事を求められ、負担が大きかった。GW中も、休みに関係なく活動することになった。授業のある期間に、同じように活動できたかどうか疑問に思えた。教員の側も、このペースで仕事をしてもつのだろうかと心配していた。

・中心となった3名は、責任感でやり通した。
・やった意味はあった。しかし、運営がつらく、疲弊した。

《後半》今後も続けていくかどうか、続けるとしたらどのようなことが必要か、についての話し合い。

・臨床家の卵として何かしたいという思いは共有されており、できれば継続したいという点で一致をみた。
・実習として認めるという点は継続してほしい。多忙な中、継続していくために。
・実習として行うとすれば、大枠は教員側に考えてほしい。
・時間をかけて行う必要がある。企画の内容に見合った時間が必要。
・あらかじめ一定期間（例えば週に一回、等）を区切って見直してゆき、それに基づいて内容を良いものにしてゆくのが良いのではないか。

6月12日、講座教員会議が実施される。担当教員より、上記の内容について詳細が説明され、それを踏まえて本企画に関しての教員間での話し合いが行われた。そして、6月15日、担当教員から実行委員に向け、教員会議で話し合われた内容として以下のことが伝えられた。

・実際に行った茶話会プロジェクトは、やるべき時にやるべきことをすることができたのであり、十分な内容だったと考える。
・今回の実践内容は報告としてまとめ、相談室紀要に掲載するのが良いのではないか。
・今後のことは非常に不確定であり、どこにも教科書が無い。おそらく誰にも分らない。手探りでやらざるを得ず、そのためには十分な準備と勉強が必要だろう。
・臨床心理学的問題を抱えた人を対象にするとすると、それは大学院生が対応できる範囲を超えていると思われる。
・継続するのであれば、教員が枠組みを作り、それに院生が乗るという形が適切ではないか。

これらの見解も踏まえ、6月23日に再び企画の今後に関して、学生と担当教員の間でミーティングが行われることとなった。この日は、①この先企画を進めていくか否か、②実践報告の紀要[6]をどのように書いていくかの2点が議題となった。

話し合いの中では、経験として企画を続けていきたい思いもあるが、ゴールデンウイークから時間も経ち、授業や修士論文の検討も本格的に始まった今、新たに企画を行っていく余裕はあまりないという意見がでた。また院生・教員双方が納得して、士気を維持したまま続けられるような新たな企画の枠を作るのも大変だろうという意見もあり、結論としては今無理に新しい企画を押し出していくのではなく、また必要とモチベーションが出たときに、新たな企画を立ち上げ、今は一旦休止という形にするのがよいのではないかということになった。

そして、このことは担当教員を通じて、教員側にも伝えられ、本企画は休止を迎えることとなった。

[6] 本論文のことである。

4. 本企画の意義と課題

4. 1 本企画の意義について

まずは、本企画が実施されたことの意義、及び本企画によってもたらされた成果について整理する。

① 感染拡大初期における心理的支援

COVID-19の感染拡大、及びその猛威によって人々の生活に制限がかけられる状況は、2021年1月現在も続いており、未だ予断を許さない状況である。本企画はこの未曾有の事態において、人々の生活に大きな変化が起こり始めた比較的初期と言える2020年4月時点の段階で、学生の心理的支援を担うべく動き出した企画である。

このCOVID-19感染拡大による生活の変化の中で必要な「心のケア」について、東畑（2019）による「時間」についての捉え方を元に考察する。

東畑は、我々が「線的時間」と「円環的時間」の二つの時間を生きていると述べる。

「線的時間」とは過去から未来へ、非常事態とそれを乗り越えたあらたな平衡状態を繰り返しながら流れていく時間のことである。線的時間の例としては、恋人との何気ない日常（平衡状態）→恋人の浮気が発覚する（非常事態）→恋人と話し合い、関係をやり直す（あらたな平衡状態）といったことが挙げられる。

対して、「円環的時間」とは、プログラムに沿って同じような日々が流れていく精神科デイケアで提供されているような、生活に大きな変化が生じる非常事態には至ることのない、「日常をもたらす」時間のことである。

COVID-19によって人々の生活が一変し、「新しい生活様式」へと適応していく過程は、まさに東畑の言う「線的時間」における平衡状態から非常事態へ、そしてまた新たな平衡状態への移行の過程と一致する。

東畑は、「セラピーというのは本当のところ、時間が上手く流れるように手伝う仕事」であり、「滞った時間を流れさせるのをアシストして、時間が心を変化させるのを待つ仕事」とも表現している。人々にとっての非常事態の最中で実施された本企画は、まさに新たな生活へと時間がうまく流れるように、参加者を支援するという意味で「セラピー」を担う場の一つとなっていた可能性がある。

② 既存のコミュニティが見落としたニーズの把握

本学教育学部は、毎年4月には学部3年生が主催となり、院生や教員も含む学部全体から参加者が集う、「新歓合宿」が学部の一大イベントとして存在しているなど、伝統的に縦の繋がりや、学生自治が強い傾向にある。

しかしながら、COVID-19の影響もあり、先に述べた「新歓合宿」の中止など、今年度はなかなかそのような学生同士の繋がりを作る機会を作ることができていなかった。その中でも学生たちはなんとか繋がりを形成しようと試みてはいたが、学生たちの主な連絡手段であるLINEを利用していなかったり、他の学生との間に壁を感じたりといった理由で、上手く学生同士のコミュニティに参入することができなかった者もいた。

本企画は、そのような既存のコミュニティの中だけでは、十分にサポートできていなかった

方々の声を拾い上げることができたという点で、意義のあるものだったのではないだろうか。

利用者がいたということ自体も、本企画が行われた意義を示すものであると言える。

元々対象者を絞っての実施ではあるが､少なからずこのような企画にニーズがあったことが､利用者の存在から明らかになったと言えるだろう。

誰も利用しないことも考えられる中、対象となった学部生45人のうち、2人が利用したというのは、学生相談の一般的な利用率を考えても、決して低い数字ではないと言えるだろう。

4. 2. 本企画の課題について

次に、本企画の課題点について整理する。なお、本論文では、企画内容ではなく、このような状況下における企画運営における課題点に焦点を当てて、整理する。

① 活動目的・役割分担・リスクの曖昧さ

まず、初学者である実行委員の学生に、対象となる学部生が抱くニーズや活動目的が明確に示されないままに、企画立案・運営が中心的に任されたことが挙げられる。

これにより、実行委員は､「学生主導で」とは言われながらも、自分たちよりも経験と知識のある、教員の求めるものをその都度窺いながら企画を進めることになった。その中で、自分たちの考えが思ったように採用されず、学生の視点からすれば「権威」である教員から変更を求められることへの不満や、どのように、何をゴールに進めればよいかが見えないまま、企画が進行していく不安が募っていったと言える。これには、教員の役割が企画者なのか、学生の企画に対するスーパーバイザーなのか、はたまた実習の指導者なのか不明瞭であったことも影響していると考えられる。

教員としては、教員は学生と同等の立場の企画者であり、運営の責任を担う責任者でもあるという意識があったのかもしれない。[7] また、このような感染症によって引き起こされた未曽有の事態での支援は、単純に地震などの自然災害の中での支援と同一視できる部分ばかりではなく、この状況下での支援に対するノウハウを持っていると断言できる人間は、教員も含め、だれもいなかっただろう。

しかし、いずれにせよ、本企画における教員の立ち位置、学生の立ち位置が誰からも明言されず、曖昧なままだったため、自然と既存の「教員と学生」という力関係に従い、学生が教員の様子を窺いながら企画を進めなくてはいけなかったというのが学生としての体感であり、そのことが運営上の大きな負担となっていた。

また、企画立案の段階において、茶話会の参加者や企画者、スタッフ、教員、それぞれにどのようなリスクが生じうるかについて、検討を行い、実行委員以外の院生や参加者を含むこの企画にかかわる人々に共有を行う時間が与えられなかったことも、課題点として挙げられる。参加者・スタッフ双方のためにも、ある程度想定されるリスクは明文化し、共有したうえで、事前に講じうる対策を行いながら運営を進めるべきであったが、今回はそのための時間が十分に確保されないまま企画が進行していくこととなった。

---

[7] この記述はあくまで著者の推測である。実際はデブリーフィングを担当した教員が実行委員に語っていたことでもあるが、教員の意識も一枚岩ではなく、「教員側」と一括りできない、それぞれ別の意識があった可能性も高い。

② 実習としての枠組みについて

先の「企画の経過」でも述べた通り、本企画は臨床心理士・公認心理師養成における学内実習という側面もあった。それにも関わらず、活動のどこまでが実習時間に算定されるかは、教員・学生双方の間で曖昧なまま企画は進められてしまった。

一般に、学内（外）実習では、心理実践として学生や院生が何かを行う際には、実践を行っている時間だけではなく、準備や振り返りにかかる時間も実習時間として算定される。これは、セッションの準備やセッション後の記録も心理療法家の職責として考えられており、それらの職務に対しての報酬も給与に含まれていると考えられることに基づいているのだと推察される。

しかし、今回は実行委員が企画にかけた時間はもちろん、企画実施中、人が多く集まったときに備え、待機していた院生スタッフの待機時間についても、事前に実習時間としてのカウントが検討されることはなく、学生の声を受け、企画終了後に教員間で行われた検討の結果、結局実習時間に加えられないという判断となった。

本講座の大学院生にとって実習の時間というのは、自身の資格取得、臨床家としての技術向上のための研鑽の時間であると同時に、大学院生としての責務である自身の研究活動・勉学の時間を割いて用意されるものである。それゆえ、活動が実習時間としてカウントされるか否かは学生からすれば非常に大きな問題であり、その部分が曖昧であったことも、「胸の痛み」や徒労感が実行委員の中に生じた一因といえるだろう。

③ 院生に対するフォローアップ体制[8]

先に挙げたような問題がある中で、院生の感じた心理的負担に対するケアが今回の実践の中でどのように行われていたのかを記述する。

先述の通り、実行委員は、教員への不満と教員からの負担にあえいでいた。よって、本来スーパーバイズを行うべき教員にケアを求めることは、企画終了後しばらく、デブリーフィングが実施されるまでは行われなかった。企画終了後の実行委員による報告の中で、負担の重さについて「胸の痛み」を感じたなどという具体的な言葉による主張がなされてもなお、その場では企画の意義や緊急事態での心理的支援についての議論が行われ、企画者の負担の重さに対するケアについては行われなかった。それは、心理的負担による傷をより深める結果になったとは言えないだろうか。

よって、実行委員の負担に対するケアは、デブリーフィングの機会が持たれるまでは他の臨床心理学講座の院生が行っていた。具体的には、執筆者の場合だと、オンライン会議ツールを用いたり、直接顔を合わせて、実行委員の不満を聴き取り、共感的に理解することで、共有を行っていた。

しかしながら、執筆者も、臨床経験がほぼない状況であり、COVID-19状況下での生活の変化や転居といった生活環境の変化、さらに大学院生活という日常生活をし続けるという心理的負担を抱えた状況で、適切にケアし続けることができたとは言い難い。実際、執筆者は、反発的な態度を取ってしまい、実行委員をより傷つける結果になってしまうこともあった。また、

[8] 本考察はスタッフとして参加した院生（田中）の記述をもとにしている。ここでの「執筆者」は田中のことであり、「実行委員」とはその同期である寺田（筆頭著者）のことである。

実行委員の心理的あるいは運営上の問題や、執筆者の心理的負担について、共有する先がなかったため、2者関係の中で苦しむことになってしまった。

この問題に対してどう対処すべきであっただろうか。まずなによりも、繰り返しにはなるが、企画の立ち上げを呼び掛ける際に、教員が責任を取り、誰に対して何を行うかという方向性を示すべきであっただろう。それがうまくいかずに、企画段階で実行委員は、教員の満足のいくよう手探りで立案を行うという結果になってしまい、企画に対する学生たちの意欲を削ぐ結果になってしまった。

また、企画を立ち上げる際に、企画について指導を行う教員とは別に、心理的負担についてケアを行う教員を設定する必要もあったと考えられる。

阪神淡路大震災について、自身の体験や記録を残した安（2019）の記述によれば、震災時には心理的支援にあたる、医師や看護師のケアを担う精神科医が置かれ、不安や不満を聴く機会が設定されていたことがわかる。

本企画の実施された状況は、震災ではなく、感染症のパンデミックであるが、非常事態に巻き込まれた当事者でもある支援者が、同じく非常事態に巻き込まれた人間の支援にあたるという点では震災時の心理的ケアに通じる部分がある。その事を踏まえると、企画の運営・指導に直接関わらない立場の教員を事前に設定し、教員と院生の双方にとっての中立的な立場として、企画を進める者のケアを担う必要があったと言えるのではないだろうか。

しかしながら、今回はそのようなケアにあたる役割の人間が配置されなかったために、各人の負担がケアされることなく企画が進み、結果として企画に対する不満や徒労感が募っていくこととなったと推察される。

5. おわりに

本企画の意義と課題について、総括するならば、有効な対抗策が確立されていない感染症の拡大という、現代日本の多くの人々が体験したことのない状況の最中において、「人とつながる」ことの難しさ、支援企画を協同で企画して、実施していくことの難しさが再認識されたといえるのではないだろうか。

今回の企画に参加した学部生は、いずれもCOVID-19の流行と、学部の制度によりこれまでとは異なる生活を始めなくてはならないという、二重の新たな環境下で、自身の必要とする「つながり」を作る機会を奪われてしまった方々と言える。本企画はそんな方々の求める「つながり」を提供し、新たな生活へと「時間を進める」ことができるよう支援する場であったと言えるだろう。

それだけではない。本企画を運営した教員・学生たちもまた、この企画の中でうまく連携をとることができなかった、うまく「つながり」を作れなかった人間であるとも言えるのではないだろうか。全員が一堂に会して、 ゆっくりと検討することが許されない状況の中、我々はメールやzoom、LINEといった手段を用いて、なんとか協同でよい企画が行えるように尽力した。しかしながら、企画の成功を急ぐあまり、次第にコミュニケーション不全に陥り、様々なすれ違いや、気持ちのズレが生じてしまった。それが本企画の課題となったのだと思う。

改めて振り返ってみると、企画のスピード感が強く求められた背景には、企画に関わった人間の「なんとかしなければ」、「何かしたい」という思いもあるのかも知れない。

教員が企画の提案を行ったメールでは、「心理臨床の専門家として、何かできないかと思案して、ふと思いついた」という表現が見られる。そして、その呼びかけに応えた実行委員3名の返信においても、教員の「何かできないか」という思いに賛同し、不安を抱えているかもしれない学部生の力になりたいと言った内容が見受けられる。企画運営に関わった人間の多くが、支援者/支援者を目指す者として、この非常事態の中で、「何か自分ができることはないのか」という思いを共通して抱いていたのではないだろうか。

本企画が実施された際には、参加者だけではなく、支援者である教員や、実行委員・運営スタッフとして関わった院生も同様の生活上の困難さを抱えており、この非常事態への対応に追われていた。しかしながら、企画にかかわる多くの人間が、このパンデミックの「被災者」であるという認識以前の部分で、学部生に対する「支援者」として企画を進めることを優先しすぎた。その結果、自分たちの足下を見つめ直し、固めていく前に、「支援者」としての責務を果たすため、企画の完成を急ぐこととなった。それ故、本企画は先に挙げたような課題が残るものとなったのではないだろうか。

そんな中で、企画の最後に行われた「デブリーフィング」は非常に有意義なものであったと感じる。この時になって初めて、学生は感じていたことを教員にすべて率直に話し、教員側もそれを受け止めて企画の在り方について再度見直しを行っていくことができたのではないか。それは「支援者」の責務から降り、学生と教員という立場はあるものの、本企画について、それぞれ個人の体験していた状況を改めて振り返ることができた機会だったように思う。

「企画の経過」でも述べたように、本企画は現在ニーズが生じたと感じた時に、新たな形で再開するための休止の期間に入っている。この決定について、「せっかく頑張ったのに、本当にいいのかな」と思う学生もいたようだ。しかしながら、穏やかになったと思ったらまた第n波の感染拡大が訪れるというこの状況下で、それぞれの学生と教員としての生活も維持しながら、支援を続けていくことが容易でないことも事実である。今はまた十分な支援体制を築くために必要な休止の期間と言ったところだ。

非常事態の最中で、人々が「時間を進める」ための場を求める時には、今回出た課題も教訓としながら、支援者はその要求に応えていく必要が出てくるだろう。本論文が、我々だけでなく、今後非常事態下で支援に携わっていく人々にとっても、示唆を得られるものとなっていれば幸いである。

引用参考文献

安 克昌（2019）．心の傷を癒すということ――大震災と心のケア（新増補版），作品社.

Cao, W., Fang, Z., Hou, G., Han, M., Xu, X., Dong, J., & Zheng, J.（2020）. The psychological impact of the COVID-19 epidemic on college students in China. Psychiatry research, **287**, doi：112934

Gao, J., Zheng, P., Jia, Y., Chen, H., Mao, Y., Chen, S., Mao, Y., Chen, S., Fu, H & Dai, J.（2020）. Mental health problems and social media exposure during COVID-19 outbreak. Plos one, 15(4).

北海道（2020）. これまでの緊急事態措置・宣言等
http：//www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/ssa/koronasengen.htm（最終閲覧日：2021年1月25日）

北海道大学新型コロナウイルス感染症対策本部（2020）．新型コロナウイルス感染拡大防止のための北海道大学の行動指針（BCP）
https://www.hokudai.ac.jp/covid-19/（最終閲覧日；2021年1月10日）
厚生労働省（2020）．新型コロナウイルス感染症について
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000164708_00001.html（最終閲覧日；2020年12月20日）
Li, J., Yang, Z., Qiu, H., Wang, Y., Jian, L., Ji, J., & Li, K.（2020）. Anxiety and depression among general population in China at the peak of the COVID‐19 epidemic. World Psychiatry, **19**(2), 249.
松本伊智朗・上原慎一・鳥山まどか・光本滋（2020）．教育学部・教育学院「生活と家計に関する緊急アンケート」報告
https://www.edu.hokudai.ac.jp/information/%e3%80%90%e6%95%99%e8%82%b2%e5%ad%a6%e9%83%a8%e3%83%bb%e6%95%99%e8%82%b2%e5%ad%a6%e9%99%a2%e3%80%91%e7%94%9f%e6%b4%bb%e3%81%a8%e5%ae%b6%e8%a8%88%e3%81%ab%e9%96%a2%e3%81%99%e3%82%8b%e3%82%a2%e3%83%b3/（最終観覧日；2020年12月20日）
松本伊智朗・上原慎一・鳥山まどか・光本滋（2020）．教育学部・教育学院「生活と家計に関する緊急アンケート（第2次）」報告
https://www.edu.hokudai.ac.jp/information/%e3%80%90%e6%95%99%e8%82%b2%e5%ad%a6%e9%83%a8%e3%83%bb%e6%95%99%e8%82%b2%e5%ad%a6%e9%99%a2%e3%80%91%e7%94%9f%e6%b4%bb%e3%81%a8%e5%ae%b6%e8%a8%88%e3%81%ab%e9%96%a2%e3%81%99%e3%82%8b%e3%82%a2%e3%83%b3/（最終閲覧日；2020年12月20日）
Rajkumar, R. P.（2020）. COVID-19 and mental health: A review of the existing literature. Asian journal of psychiatry, **52**, doi:102066
東畑開人（2019）．居るのはつらいよ―ケアとセラピーについての覚書― 医学書院
World Health Organization（2020）WHO Health Emergency Dashboard
https://covid19.who.int/（最終閲覧日；2020年12月20日）
四方田健二（2020）．新型コロナウイルス感染拡大に伴う不安やストレスの実態：Twitter 投稿内容の計量テキスト分析から．体育学研究, **65**, 757-774.
Zhu, N., Zhang, D., Wang, W., Li, X., Yang, B., Song, J., Zhao, X., Huang, B., Shi, W., Lu, R., Niu, P., Zhan, F., Ma, X., Wang, D., Xu, W., Wu, G., Gao, G., Phil, D & Tan, W（2020）. A novel coronavirus from patients with pneumonia in China, 2019. New England Journal of Medicine, **382**, 727-733

Abstract

This paper describes and discusses the records of clinical psychological support activities conducted by graduate students and faculty of the Department of Clinical Psychology for undergraduate students under the declared state of emergency caused by COVID-19. The

significance of this activity was found to be (1) that it could provide psychological support in the early stages of the spread of the infection, and (2) that it could identify needs that were overlooked by the existing community. In addition, three issues were found: (1) ambiguity in the purpose of activities, role assignment, and risk assessment; (2) clarification of conditions considered as practical training; and (3) organizational support system for graduate students. As a result of these factors, the burden on graduate students was considered to be very high. The difficulty of connecting with others due to the COVID-19 epidemic seems to have cast a deep shadow on the support activities.